



2017年12月/
2018年1月号
新版 第89号
編集
駿台甲府高等学校
駿台甲府中学校
駿台甲府小学校

今井キャンパス高校部門

駿台甲府高校副校長 筒井揚介

★美術デザイン科について

美術デザイン科は、一九八五年に従来の「デザイン科」を改称する形で発足しました。普通科の六期生の時です。美術系の「専門学科」は全国でも珍しく、県内では唯一の学科として歩み続け、卒業生は一〇〇〇人に上っています。生徒たちの力作は県内の数々のコンクールでの受賞作品となり、またデザインも採用されています。山梨県警高速機動隊のワッペン、平成二年に美デ科の生徒が手掛けたものだそうです。

専門学科として週に八、十時間美術の授業があり、さらに平日は夜八時まで自主制作が行われています。四月には新入生ガイダンスを兼ねた宿泊研修が行われ、夏には美術を基礎から学ぶ夏期講習会、日本画講習会があり、秋には小瀬で写生会が開かれます。今井キャンパスに来たことがある皆さんはバス停の壁画をご覧になったことがおありかと存じます。あの壁画は一月

に総合的学習の一環として制作されます。一枚の絵を三六分割して一人一人が精魂込めて部分を塗り、一枚の絵を完成させていくときの共同感や一体感、共同制作ならではのものです。それは六月の「駿美祭」での舞台や校舎の装飾にも遺憾なく発揮され、学園祭を大いに盛り上げています。このほか、美術館・五美大展・芸大卒業展などすぐれた作品の鑑賞を通して美術の腕を日々磨いています。

★第三回美術デザイン科展

一月三日から八日にかけて、県立美術館において、学科最大のイベント、美術デザイン科展が開催されました。生徒が本展のために制作したコンクール作品をはじめ、授業等で描いてきた作品を約九〇〇点展示し、日ごろの活動を披露する場です。県立美術館という県内の芸術の拠点で美デ科単独で展覧会を開催できることは非常に名誉あることで、約一〇〇〇名の皆さんに鑑賞していただきました。ご来場ありがとうございました。作品は展示され、鑑賞され、批評されてこそ意義あることとなり、生徒自身も緊張と高揚感をもってこのイベントに臨んでいます。

美デ科発足から毎年欠かさず行われているこのイベントは、今は無き県民会館で行われていたこともあり、美デ科の歴史そのものです。皆様の投票によって選ばれた作品を一部載せておきます。これらの作品をはじめ、生徒たちの作品を掲載した「美デ科創作集」を毎年三月に発刊しております。

今、教育界で話題の「思考力・判断力・表現力」や「共に学びあう力」などは、美術デザイン科においてはなじみ深い言葉です。生徒は三年間の作品という「ポートフォリオ」をもって自らの進路を果敢に切り開いています。



上 3年準大賞 武川 七瀬
先生 F4号×17枚 油彩

右 3年大賞 進藤 穂野香
華守生 薇逢樹-camouflage-
B2×8枚 ペン画



★通信制課程について
今井キャンパスには、高校部門として美術デザイン科とともに通信制課程があります。二〇〇〇年に広域通信制普通科として認可を受け、年々募集地域を追加し全国各地に学習センターを開設しています。開校以来の卒業生も六三〇〇名を数え、それぞれ社会で活躍しています。

通信制課程の学習方法は、課題提出・面接指導・定期試験の三本柱で、レポート学習は生徒本人が自主的に学ぶことが求められる内容となっております。スクーリングで学習をより一層引き出すような授業が工夫されております。また、「総合的学習」は本校独自の探究型の学習内容となっており、生徒自らが興味・関心を持ったテーマを徹底的に調べあげ、相当な分量のレポートにまとめていくものです。興味あることとはいえ、悪戦苦闘している生徒も多いですが、完成した時の達成感もひとしおです。また、進学を目指す生徒の学力向上をサポートする「駿台サテネット21」の利用も可能です。この、生徒個々に対応した映像での学びは本校ならではの特徴です。

通信制課程は来年度より、東京学習センターを拡充して、場所も「駿台四谷校」に移し、「四谷学習センター」として新たに教育を展開していくことになりました。

多様な学びを支える駿台甲府に、皆様のより一層のご理解をお願いします。

小中学生新聞感想文コンクール

(山梨日日新聞主催)

今年も本コンクールに駿台から多くの児童生徒が参加し、優秀な成績を修めました。その中から中学生2名の作品をここに掲載します。

文部科学大臣賞

「オドリ」…踊るじょうじょう

望月璃々子 (駿台甲府中2年)

踊ることが好き。自分も含めてそう思っている中学生はたくさんいるはずだ。それが証拠に今春の文化祭では、ほとんどのクラスが踊った。そこには普段とは全く違った生き生きとした友達達の姿があった。なぜ、踊りは人を虜にするのだろうか。

私は三歳からバレエを習っている。最近ではジャズダンスやレビューダンスも加わった。踊ることが楽しくて仕方ない。曲が流れてくると体が反応してしまう。日常生活の中に当たり前のように踊ることが組み込まれているせいか踊りについて深く考えることなどなかった。ただ楽しければいい。そこに理由など必要なかった。過去形になったのは、ある記事を読んだからである。

ある朝、私は好んで読んでいた「笑い命さざめく」シリーズのカンボジア

編に目が留まった。一人の老女の写真と美しい踊り子の写真が同一人物だと気づいたのは記事を読み進めてからだ。カンボジアという国。アンコールワット以外は馴染みがなくイメージが沸かない。記事に取り上げられている踊り子、トン・サバンはカンボジア王宮の踊り子だった。9世紀頃に生まれた伝統舞踊の数少ない伝承者だ。市民二百万人の大虐殺で知られるポルポト政権の誕生と崩壊に翻弄された彼女の人生の壮絶さに、私は金縛りにあったように、しばらく紙面から目が離せなかった。きらびやかな衣装と音楽、見る者を幸せにする踊り子は一転、踊り子であることが知られたら殺されてしまうという生活を生き抜いてきた。

踊ることが死に直結しようとは、平和が当たり前の私たちには想像することさえできない。そして、これは遠い昔のことではなく、今から二十年前のカンボジアの実話だから驚きだ。しかし、この記事をきっかけに「踊り」について調べてみた。踊るといふ行為は、古い時代に遡ると縄文時代以前、石器時代からではないかと考えられているようだ。踊りは神への捧げ物から貴族などの権力者の所有物になり、やがて現代のような大衆の娯楽となった。太古の代のような大衆の娯楽となった。太古の踊りは人々の魂の叫びだった。それが踊りの原点であることは、私たちのDNAに組み込まれているような気がする。「笑い命さざめく」シリーズのガーナ編では、全身全霊で踊り続ける葬儀が紹介されていた。天国への旅立ちを祝うために踊るといふ。悲しみに身を任せて踊るうちに笑顔を取り戻すとい

うから踊りには不思議なパワーがあるのだろう。日本では、葬儀で踊るなど考えられないが、平安時代から鎌倉時代には踊り念仏が広まり、盆踊りや歌舞伎踊りにも影響を与え、日本の文化に息づいているという。

私は、大好きな踊りや歌を活かした仕事に就きたいと思っている。プロの表現者として踊ることに興味がある。踊りにはたくさんさんのジャンルがあつて、その数だけ歴史がある。私たちが何気なく踊っている踊りにも、その背景には悲しい史実があるかもしれない。私たちは、そういった背景にまで想いを巡らせて踊っているだろうか。否。

カンボジアの伝統舞踊に限らず、世界には悲哀の歴史を持った舞踊が多いのではないだろうか。伝統舞踊を命がけで守って来た人々のお陰で私たちが踊ることができるのだ。この夏休み、私は家族とニューヨークを旅行した。さまざまな人種の行き交う街に9・11の跡地がある。そのすぐ近くには世界最高峰のエンターテイナーが集まるブルードウェイがあり、連日にぎわう。隣でテロが起きていてもステージでは笑わないといけない。どんなつらい時でも笑わないといけない。混沌とした街の道端で踊る若者たちは幸せそうに見えた。踊りつて何だろう。踊りを本気で仕事にしていくならば、私には考えなければいけないことが山のように沢山あるのではないかと、思うようになった。この記事は、舞踊を目指す私に一石を投じてくれた。踊ることは心そのものの、というトンの言葉を忘れまい。

体力十気力十学力？

駿台甲府小学校 嶋田 顕

昨年は将棋界の話題に事欠かない一年となりました。新星藤井四段による二十九連勝から始まり、天才棋士ひふみんのメディア人気と引退。そして、年末年始にかけては、羽生善治氏の永世七冠達成と国民栄誉賞授与決定のビッグニュースが日本中を沸かせました。羽生氏に関しては、この三十年に渡って将棋界を牽引し続けるだけでなく、現在も尚、棋士として進化し続ける姿から、今回の偉業達成もまだまだ道半ばであり、更なる高みを見据えているような気さえてしまいます。

そのような衰え知らずの羽生氏の名言の中で、次のような言葉があります。『集中力の基盤になるのは根気であり、その根気を支えるためには、体力が必要だと思っている。』

即ち、体力がないと苛立ちに負けて、考える力はまだ残っているのに、結論を急ぎたがり、最後まで集中して頑張り切れないのだそうです。数多くの対局経験を通して語られる、体力と気力と知力の相関性の高さは否定できません。一昔前、「知力？体力？時の運？」という掛け声とともに始まるアメリカ横断ウルトラクイズなる番組がありました。最後まであきらめない気力(「チャレンジングスピリット」)であり、その為には体力が必要不可欠と言えるものかもしれません。では、羽生氏が言われるように気力を発揮し且つ維持するには、

県教育長賞

便利さの先に

穂山太希(駿台甲府中1年)

便利で大人なら誰もが利用したことがあるだろう宅配便。それが今、いろいろな問題が起きている。

先日、テレビ番組で女性タレントさんが荷物の再配達と時間指定のサービスについて聞かれてコメントしていた。「再配達をよく利用していません。とても助かりますね。それに時間指定も夜間によくなりますよ。だけどこの前、配達された時にお化粧をしていなかったの、居留守使っちゃいました」と、ニコニコしながら話していた。僕はびっくりした。そんな時この記事を読んだ。

「サービス見直すヤマト/料金値上げや時間短縮」の大きな見出し。

インターネットの通信販売の利用が広がり、配達する品物が一気に増え、配達する人が昼休みも取れず、また夜遅くまで作業をしなければならぬそう。その改善策として、値上げやサービス変更をすることにした。また、人手不足は宅配業界だけではない。コンビニやファミレスでも深刻な問題で、対策としてセルフレジの導入や深夜営業をやめたりもしている。企業としては、働く人の環境とサービスを受けるお客さんの満足度とのバランスをどう取るのが課題となりそう。僕の家でも時々宅配便で荷物が届く。

予期せぬ荷物で受け取れなかった時は、不在通知が入っていて再配達をお願いしている。それ以外は時間指定をして必ず家に居るようにしていると、母が話してくれた。

僕は再配達や時間指定をしているのに、出かけてしまったり、家に居るのに受け取らない人がいることが不思議でならない。頼んだ人が責任をもって守るべきルールだと思う。配達の人、またその家を訪ねなければならぬ。みんながルールを守らないから、仕事はいつまでたっても終わらない。

反対に宅配業者の人が荷物をたたきつけているニュースを見たこともある。何度も何度も再配達で嫌気がさしてしまったのか。それとも荷物の多さにイライラしていたのか。でも品物は配達の人物ではない。その荷物を待っている人がいる。誰かからのプレゼントかもしれない。配達する人がほんの少し、相手の人のことを考え、行動していたら荷物を投げつけることなどしなかっただろう。

結局、荷物を運ぶ側と受け取る側の双方のモラルの問題だと思う。お互いがその立場になればきつと大変さがあるはず、ほんの少し相手のことを気にかける心のゆとりを持つことが大切だと思う。

インターネットやスマホが普及し、全てに便利さとスピード重視になっていく現代社会。いくら技術が進歩しても、大事なものはそれを使う人間の気持ちだと思う。結局便利な宅配サービスも値上げやサービス変更になれば「高・不便」と不満が出るだろう。せつ

かく便利で良いサービスも利用する側が働く人を追い込んだ結果ではないか。便利で快適なことを追求するばかりで、相手を思いやる気持ちを忘れてはいないだろうか。

人が生活するためには、技術の進歩は欠かせない。またそれによって生活が豊かになるのは間違いない。でも便利さが当たり前になり、ボタン一つで何でも出来る毎日を送っていると、相手の立場になって考える、という人との生活の中で一番基本的なことを忘れてしまったのではないか。そのツケは結局自分に返ってくるのに。

この記事を読んで、僕は相手の気持ちになって考えてから行動するということが、やっぱり大切なことなんだと、改めて思った。

ネットが当たり前のインフラとなり、SNSが人を結んで、情報を得る手段は多様になりましたが、現在においても新聞の果たす役割は大きいと感じます。教育の場においては最近よくNIE(Newspaper in Education)という言葉を目にします。これは、学校などで新聞を教材として活用することです。1930年代にアメリカで始まり、その後、教育界と新聞界が協力し、社会性豊かな青少年の育成や活字文化と民主主義社会の発展などを目的に掲げて、日本でも全国で展開しています。やはり教育上、新聞は重要なツールです。このようなコンクールをきっかけに今後も多くの児童生徒が新聞を読み、思考の扉を開いて欲しいと思います。

どれほどの体力を要するのでしょうか。一説には一つの対局で二キロ体重が減量することもあると聞きます。(実際には脱水状態なのだそうですが)。

そこで、駿小生の体力値は：？体力向上を目的とした体育委員会企画の縦割り活動も毎年名称を変えながら早五年。じわりじわりと駿小生の体力測定値は向上してきました。今年度は「駿小チャレンジカップ」という大会名の下、全校児童による◆障害物リレー◆探し物リレー(借り物競争の類です)

◆二回の
駅伝大会
の全四回
を企画・実
施してい
るところ
です。体力
向上とい
う目的の
他にも、他
学年の児
童と触れ合
う良い機会
となり、個人
ではなくチ
ーム戦とな
るため、仲
間のた
めに頑張
ろうとする
意識も育
みます。

ひよっとしたら、二年後の東京オリンピックに間に合わなくとも、次回のパリ、その次のロサンゼルス大会に出場する日本代表の中に駿小卒業生がいる可能性が：と期待も膨らみます。実際に鈴木徹選手や佐野夢加選手といった駿台からの偉大な卒業生がいるわけですから、可能性は無限大です。目標(ゴール)を明確に定め、そのゴールへと向かう正しい努力を重ね続けられ、夢の実現に近づけば幸いです。



健(犬)康第一・元気な年に

駿台甲府小学校 山岸 なぎさ

皆さんは、お正月で飾った門松やしめ縄などのお正月飾りは、お正月が終わった後は、どうしていますか。日本には、どんど焼きという、お正月の門松やしめ縄それに書き初めなどを、火にくべて焼き払う伝統行事があります。お正月飾りを燃やすことで、お正月に天から下りて、お家に来てくれた歳神様が、どんど焼きの煙に乗って、天に帰れますよという意味があります。歳神様というのは、簡単に言うと、福を呼んでくれる神様です。どんど焼きは歳神様をお見送りしながら無病息災や五穀豊穡を願う行事なのです。どんど焼きの始まりは、小正月に行われていた毬杖(ぎっちやう)と呼ばれる、平安時代の貴族の遊び(木ででき



た杖で毬を相手のゴールへ入れるというホッケー的な遊び)が元だとされています。毬杖に使う杖を三本揃えて、その上で短冊や扇子などを焼き、陰陽師がその年の運勢を占っていたそうで、その行事が「三毬杖(さぎちやう)」と呼ばれ、後に庶民にも伝わり、どんど焼きが誕生しました。どんど焼きと呼ばれる理

由は、尊いものを焼く(どんどは、尊いの意味)、どんど燃える様子からの説が考えられています。駿台甲府小学校でも、開校当時から、毎年続けられているどんど焼き・凧あげを今年は、小正月で

ある、1月15日に行うことができまして。

1・2校時に、1・2年生が野球場で凧揚げを行いました。凧は、冬休みの宿題として、家庭で取り組んだものです。当日は、お天気が良かったのですが、余り風が吹いておらず、苦労しながらも、一生懸命友だちと協力し、競争しながら走り、凧を揚げました。どのようでしたら、高く飛ばすのか、形や大きさを工夫し、思い思いの絵を描いた鮮やかな凧を高く掲げることができました。



3校時には、全校児童が、芝生広場に集まり、児童会の進行で、どんど焼きを行いました。まず、長い木や藁を使って作った櫓の中に、子どもたちが願い事を書いた凧の絵の紙、春駒・書き初め、家庭から持ってきたお正月飾りなどを入れました。どんど焼きの由来等聞いたあと、いよいよ櫓に点火します。火を入れると瞬間に炎が燃え上がり、子どもたちは、大興奮。煙が高く昇れば昇るほど、上手になるとい

書道ガールズ

高校普通科書道部顧問 中村慎介

うことで、手を合わせてお願いをする子どもたちの姿が印象的でした。

最後に、1・2年生は、どんど焼きの火で焼いた繭玉団子を食べました。これを食べると1年間健康でいられる、虫歯にならないなどのご利益があるというので、感謝していただきました。甘くて、ほかほかの焼きたてのお団子は、とても美味しくいただくことができました。

一昨年に同好会から部に昇格した書道部は今年になってさらに活動の場を広げています。毎年恒例となっている文化祭での書道パフォーマンス、体験授業で来校なさった方々への披露に加えて、今年も積極的に学校外の活動に取り組んでいます。夏には県書道パフォーマンスに初めて参加しました。練習を重ね、納得のいく作品に仕上がりました。のびのびと

演じた部員のパフォーマンスは思えないものでした。多くの先生方からはお褒めの言葉を頂きました。また、秋には冬季国体の応援イベントにも参加しました。



学内では、先に述べたイベントに加えて、マレーシア、カナダからの留学生を迎えての歓迎イベントで、日本古来の伝統である書道を心行くまで留学生の生徒さんや引率した先生方に楽しんでもらえたと思います。また、二期の終業式では受験を迎える三年生に『道』と題した応援メッセージを送りました。

個人としては、部長である二年B組の飯田亜矢さんが、県の芸文祭で昨年は奨励賞、今年には優秀賞受賞と目覚ましい活躍を見せています。

現在の書道部員はわずか七名です。内、書道の経験があるのは四名。言い換えるならば、初心者でも楽しめる部活動なのです。書道を通じ、日本の伝統芸能に触れ、見るものを楽しませたいと思う人なら誰でも大歓迎です。ぜひ、仲間となって、書道を楽しみませんか。